

運命の出逢い

Destined Encounter



KIMI ORR

(23期 KIMI ORR／旧姓 金村紀美子)

2022.09.05



運命の出逢い



♣ 初めに

私 (Kimi Orr) がアメリカに2回目の渡航をしたのは33歳の時であった。この年になるまで結婚するチャンスもなく、私の心も揺れ動いていた。本当に結婚したいのかどうか、自分でも分からなかった。別に彼がいたわけでもないが、お見合いも何回もしたがうまくいかなかった。

あの頃妹と二人で文化住宅に住んでいた。結婚してもこんな古い文化住宅に住むんやったら、もう結婚はいいかなと思った。いろいろ考えた末、結婚は私の人生でないことに確信を得た。
『そうや、アメリカに行って大学に行こう。語学力を身に付けて日本に帰ってきても何とかなるやろう』



♣ “腕時計をくれた人と結婚しよう！”

初めてアメリカに行ったのは29歳の時であった。カリフォルニアにある大学で語学を学んだ。その時、自分がこれほどまでに英語が出来ないことに驚き落胆した。そうやまた3年後に来るんや。

そしてそれを実行する時がやってきた。いろいろと準備しながら、長い間、腕時計がなかった。今回は買わないかんなと思った途端、『そうや“腕時計”をくれた人と結婚しよう！』と、思う自分に驚いた。結婚は自分の人生に当てはまらないことを確認したはずなのに、、、私が腕時計が無いのを見て3歳上の兄が「僕の腕時計持っていき」と自分の時計を腕から外して私に手渡した。「お前は頭がないから大学なんか行けるか」といつも言っていた兄が優しかった。その兄の大きな時計をはめて私はアメリカに旅立った。今回の行き先はサンフランシスコから車で2時間、モントレーというところであった。そこで大学に行くためにトイフル（脚注①）を受ける準備をするのだ。

(脚注①トイフル) TOEFL (読み方: トーフル、トフル) とは、英語を母語としない人々を対象に1964年から実施されている国際基準の英語運用能力テストです。オーストラリア、カナダ、イギリス、アメリカを含む130か国、10,000以上の大学・大学院に入学を希望する際に英語力の証明として必須とされており、全世界でこれまで延べ3,000万人以上の人人が受験しています。出典: TOEFL日本事務局

♣ モントレーで

モントレーの空港に降り立った時、タラップ先生が迎えに来てくれていた。彼女は私が最初にアメリカに来た時の語学学校の先生であった。あの頃大学院生で日本人の学生に人気があった。私が日本に帰国してからも手紙のやり取りはしていた。再びアメリカに行くといったら、自分が教えている学校に来たらいいということで即、決まった。彼女は新聞広告を出して私の下宿先も探してくれたという。彼女の気遣いがありがたかった。私が到着した明くる日、彼女の車でその下宿を案内してくれた。私の通うはずの学校からバスで15分くらいだという。年老いた夫人と離婚した息子がいた。私の部屋であるべきところが彼のもので占領されていた。においがぷーんと鼻につき、クロゼットには彼の服もびっしり掛けられていて、私の服など掛けられる隙間もなかった。部屋もベッドばかり大きく、机を置く場所も所狭しで気に入らなかった。私がこの部屋に住めば、部屋が2つしかないから彼は多分居間に住むだろう。これはまずい。こんな不安な気持ちは今はっきりしないと駄目だと思い、申し訳ないと思いながら私の気持ちをタラップ先生に告げた。又、学校に行くのにバスに乗るのも気に入らなかった。彼女は怒った！『この家もやっと見つかった家なのよ』



♣ 自分で探した下宿

その帰り道、学校に向かった。ハウジングオフィス（学内にある学生支援的な機関）にはかなりの学生がいた。

掲示板にはいろいろな家の紹介があった。学校から歩いて5分くらいの距離で家賃もそこそこ無難な所を探し、その翌日に先生のアパートからそこに移った。私が住む家の横を表通りから、坂のように下って行き、裏庭から部屋に入る所以私専用のドアであった。家に入るたびに家の人たちと顔を合わせなくていいから気楽で気にいった。家族は娘さん二人と、年老いた母親であった。下の娘さんは歯医者に勤め、上の方は40歳くらいで刑務所でイタリア語を教えていた。刑務所でイタリア語を学べるなんてなかなか乙やなと思った。母親は全く英語をしゃべらない。週末は近くに住んでいる息子の家族が来るので、その日はスパゲティーを食べるらしく、上の娘さんのマリヤは地下でミートボールをよく揚げていた。彼女とはすぐ親しくなった。



教会のパーティーで

金曜日の夕方、教会でパーティーがあるからと私を誘った。なんでも見てやろうという気持ちでいたから彼女の誘いに乗った。このパーティーは毎週行われるという。離婚した男女や独身の人たちに、良き相手を見つけるきっかけを与えようという場なのだ。さすがはアメリカだと思った。教会の雰囲気も上品で、落ち着いた音楽が、なお人々の心をしっとりさせているようだった。しばらくすると少し年老いた男性が私に近づいてきて、一緒にダンスをと手ぶりをされた。私も自然に彼の誘いに応じた。

ダンスをしながら2、3彼の質問に答えながら、周りを見ると、かなりの人が踊っておられた。

しばらくして彼は囁くように

“You are my wife. You are so quiet.”

(あなたは僕の妻だよ。とてもおとなしいしね)

と言われても、今しがた会ったばかりなのにどうすべえ。



明くる日彼はマリヤを通じて私に電話してきた。『会いたい』という。用があるということで断った。私はまだアメリカ人の気質を知らない。車に乗ったらどこに連れていかれるやらという恐怖もある。

その当時、デイトなんて考えにとても及ばなかった。其の明くる日、2回目の電話が入った時、マリヤが電話に出るかどうか私に尋ねたので断った。後でマリヤが言うには『彼は毎日電話をしてきて、ある時は4回も電話してくるのよ。彼ちょっと“くるくるパー”じゃない！』という手ぶりをした。2人大笑いした。

(次回に続く)



アメリカ合衆国

カリフォルニア州



モントレー
Monterey

